——海からきた使い——

イルカのオポ

藤原英司

913
藤原英司
海からきた使い イルカのオポ
佑学社 1981
122p 21cm
ふじわら えいじ

海からきた使い **イルカのオポ**

1981年10月20日 第一刷発行

著者 藤原 英司
発行所 株式会社 佑学社
代表者 三井数美
〒101 東京都千代田区猿楽町 2−3−1
電話 東京 291−6155〜7
振替 東京 5−190823
印刷 三美印刷
製本 徳住製本所

©1981 Eiji Fujiwara

佑学社

すべてのイオリアの住民にとって、
少年とイルカの愛の物語は、
　　忘れることのできないものだ。
この話は、大昔のできごとではない。
われわれ自身の時代に起こったことなのだ。

――古代ギリシアの詩人オピアンの『漁』より――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

海のおばけ　6
オポ　12
ボールあそび　20
立ちあがったイルカ　25
新聞記者　31
信じられないできごと　36
みなしご　41
おとぎ話の世界　46
けがをしたオポ　51

オポが帰った　56
神さまの使い　61
輪になって遊ぼう　69
浜の夜　76
サメだ！　81
オポを守ろう　88
パトロール　94
歌まつり　98
あらしの夜　104
いつかまた天国で　109
あとがき　115

絵　菊池勝子

海のおばけ

ニュージーランドという国を知っていますか。日本からずっと南へくだっていくと、毎日、暑い日がつづく南洋の島じまがあります。南太平洋の島じまですね。そこを通りすぎてさらに南へくだっていくと、また気候がすずしくなります。そしてニュージーランドという国へつきます。そばにはオーストラリアという大きな国もあります。

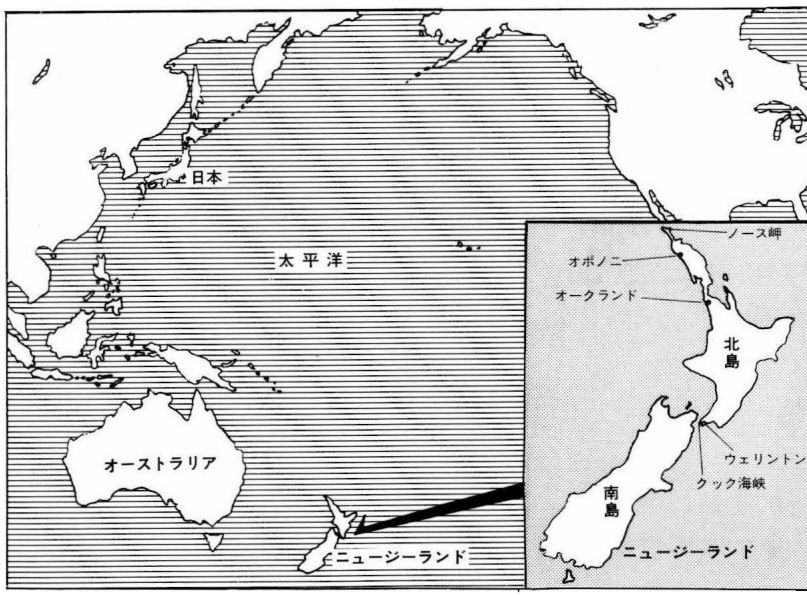
ニュージーランドは、北島と南島という大きなふたつの島からできていますが、その大きさは日本の本州と四国をあわせたぐらいです。

ニュージーランドの北島というのは、北海道の北のはしと南のはしをつまんで、

たてにひきのばしたような形をしています。その北島の北のほうに、オポノニという小さな港町があります。

今、その港町の夜が明けはじめたところです。オポノニの港は、太平洋にめんしたところからすこし陸のおくへはいっていますので、外海の荒い波は港の中までおしよせてきません。港にひろがる水のおもては、かがみのようにしずかでした。港のそばに建っているホテルも、ひっそりとしずまりかえっていました。

やがて海辺の道を、ふたりの男が肩



をだきあって、よろよろした足どりでやってきました。
「うー。なんだ、まだ明るいじゃないか。日がくれないうちに帰ることはないぞ。おい、飲みなおしだ！　飲みなおしだ！」
　すると、もうひとりの男がいいました。
「なにいってんだ。夜が明けてきたんだよ。おれたちは、夜どおし飲んだんだぞ」
「ばかいえ。夜どおし飲んだのに、日がしずまないってことがあるのか。だいいち、おれは頭がこんなにはっきりしていて、足もしゃんとしているぞ」
　そういったとたんに、その男は今にもころびそうになって、もうひとりの男があわててその男の体をだきかかえました。
「やれやれ。よっぱらいのめんどうをみるのは楽じゃないよ。せめて、おまえがおれくらい酒が強ければいいのに」
　すると、あいての男はいいました。
「なんだと。おれが酒に弱いだと。じょうだんじゃない。こんなになにもかも、

はっきり見えて頭がぱっとしてるんだ。日ぐれと夜明けをまちがえるおまえのほうが、よっぽどよってるぞ。見ろ、あそこにひとり、女がおよいでる。夜明けにおよぐばかがいるか」

なるほど、少し先の海辺で、女の人らしいすがたが、ゆっくりおよいでいるのが見えました。女の人は頭だけ水の上へだしておよいでいます。

「ほんとだ。そういえばおよいでるな。すると、やっぱり、まだ日がくれていないのかなぁ」

あいての男は自信がなさそうにいいました。つまり、ふたりとも、だいぶよっぱらっていたのですね。

ふたりはよろよろしながらすすんでいきました。すると、むこうのほうでおよいでいた女の人が、くるりとむきをかえて、ふたりのほうへおよぎよってきました。しかも、すごいスピードです。

ふたりは思わず足をとめて、その女の人を見つめました。それからふたりは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ほとんどどうじに声をあげました。

「で、でたぁ！」

およぎよってきた女の人は、のっぺらぼうの顔で、ぬれた一本一本のかみの毛は、小ゆびくらいの太さがあったのです。

ふたりはかけだそうとして足がもつれ、その場にそろってしりもちをついてしまいました。そして、ふたりはすぐになんとか立ちあがろうとしましたが、腰(こし)がぬけてしまって立てませんでした。

ふたりはしばらくじたばたしたあと、また手をとりあって海のほうを見ました。しかし、女の人のすがたは、もうどこにも見あたりませんでした。

オポ

すっかり夜が明けました。きょうもいい天気です。

オポノニの港には木の桟橋（海岸から海へ長くのびた橋）がありました。漁から帰ってきた船はこの桟橋に船体をくっつけてとまり、魚をおろしたり人がおりたりします。

今、桟橋の上にひとりの少女が立って海のほうを見ていました。少女は水色の水着をきて、大きな赤いゴムのボールをかかえていました。

桟橋のむこうに青あおとした海がひろがっています。波はしずかでしたが、高くのぼりはじめた日の光をうけて、小波がきらきらと、銀のこなをちらしたようにきらめいていました。

少女はだれかをまっているようです。お父さんが漁にでかけて、その帰りをまっているのでしょうか。カモメが二わ、ゆっくり羽ばたきながら青い空と、銀色にかがやく海のあいだをしずかにとんでいきます。少女はカモメのすがたを目でおっていきました。カモメはだんだん遠くなり、きらきらかがやく水平線のかなたへ消えていきました。

すると、カモメといれかわるようにして、水平線に白い点があらわれました。点は白い波のきらめきのなかで、日の光をうけて、ちかちかとかがやいて見えました。

カモメがもどってきたのでしょうか。いいえ、そうではありません。それは白い船でした。点はだんだん大きくなり、やがて、はっきりと船の形になりました。波をけたてて、どんどん近づいてきます。

やがて船のまえで、なにか黒いものが水の中からとびだしました。なんでしょう？　その黒いものは、すぐに海の中へ落ち、たいへんな水しぶきがあがりました。船は水しぶきのかげにかくれ、ちょっとのあいだ見えなくなりましたが、またすぐに、いきおいよくすすんでくるのが見えました。

そのご、黒いものは、たびたび水の中からとびだし、まるで船と競争するように桟橋へ近づいてきます。

「オーポー」少女は大きな声でさけびました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com